

故郷に残る 伝統の舞を 次代につなぐ



山

木屋地区に残る三匹獅子舞は、古くから地元住民に親しまれ、昨今は毎年10月の第一日曜日に、山木屋の総鎮守である八坂神社の境内で行われてきた。勇壮で力強く、時に荒々しく踊るこの舞は、筥（ささら）と呼ばれる獅子の先導役、太郎獅子、次郎獅子、雌獅子役で構成される。本来であれば地元の小学校5、6年生の子どもたちが6年間にわたり踊りを担当し、担当を終えた後も太鼓や謡などを

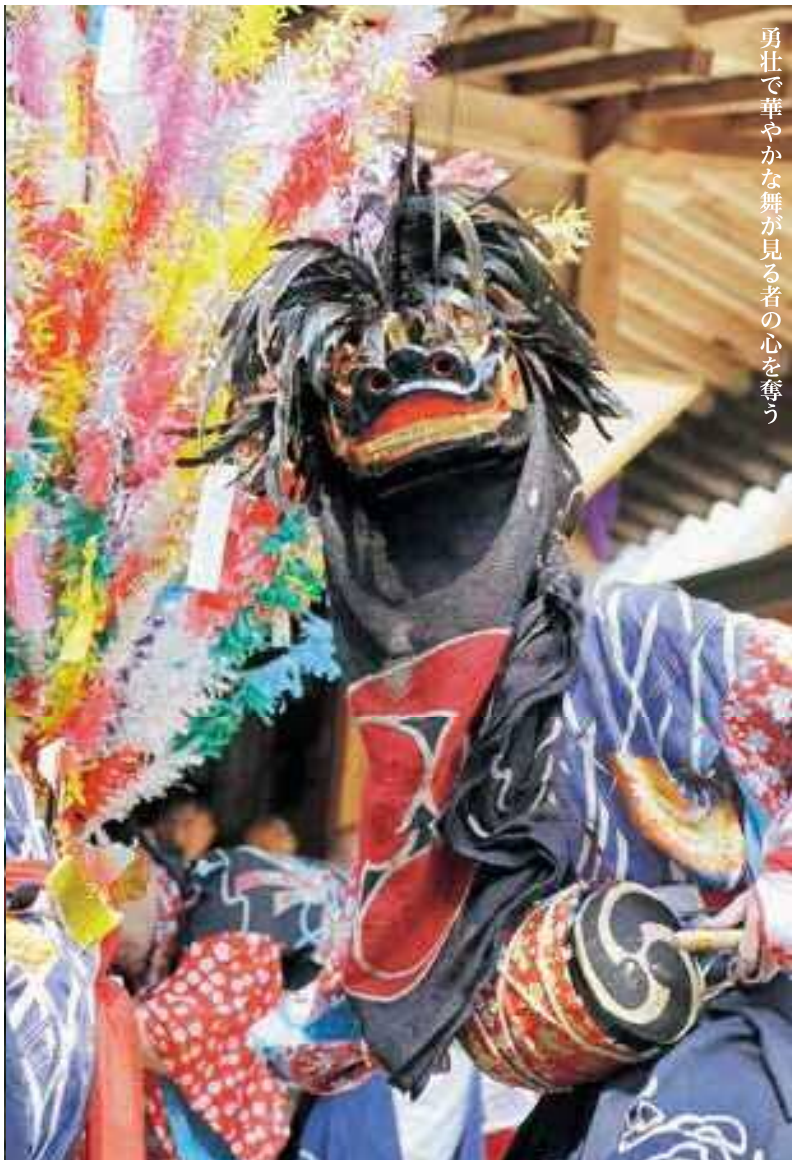
獅子の継ぎ手、そして踊りの師匠として獅子舞に関わり続ける仕組みで、親子へと伝わる山木屋地区の伝統行事だった。

しかし、今回は、避難指示解除後、初の八坂神社秋季例大祭を迎えたものの、避難先から子どもが山木屋にほとんど帰還していないことなどから、本来であれば師匠として獅子舞に関わる、かつての踊り手が結集し、七分分の深い想いを込めた舞を奉納した。

この山木屋の三匹獅子舞が、これまで長年にわたって地域文化を支え、住民に愛されてきた理由の一つに「宿」制度が挙げられる。「宿」とは、上組、下組ともに、当番になった集落が、それぞれ獅子舞に関する道具の一切の管理のほか、獅子の練習から祭りまでの一か月間にわたり家を開放し、獅子舞の奉納に全面的に協力するというものである。残念ながら、この「宿」は、原発事故による避難により廃

止を余儀なくされた。文化的にも大きな意味を持つこの「宿」が、いずれ再開されるのが、山木屋三匹獅子舞、そして、山木屋の伝統文化の本当の意味での復活と言えるのかもしれない。しかし、平成29年10月1日、これまで三匹獅子舞の伝統を次代に継承してきた者たちの手により、一度止まった歴史が再び刻み始められたこの事実は、山木屋八坂神社三匹獅子舞の歴史に深く刻まれることだろう。

勇壮で華やかな舞が見る者の心を奪う



獅子頭に見る上組、下組

山木屋の上組、下組で毎年交互に奉納されてきた三匹獅子舞には、それぞれの地区の伝統を表すかのごとく、曲目や踊りに違いがある。目に見える大きな違いの一つが獅子頭。上組の獅子は四角張った顔で、力強く迫力ある雰囲気を持ち、下組の獅子は面長で、凛として繊細な雰囲気を醸し出している。

上組獅子頭



刻師：近藤 佐馬次郎

下組獅子頭



刻師：米倉 均



奉納後も五穀豊穡を願う舞は続く

伝統を引き継ぐ者たち

*



笥（ささら）担当 遠藤 和成 さん

300年を超える歴史があると言われるこの三匹獅子を、この場所で継承する意義と責任を強く感じます。今回、多くの方の支えによって、三匹獅子舞を八坂神社に奉納させていただいたことに心から感謝しながら、この素晴らしい伝統を次の世代にしっかりと引き継いでいくことが、これからの自分の役目だと思っています。



太郎獅子担当 広野 智也 さん

本来であれば師匠として参加する予定でしたが、次の代の都合がつかないということで、踊らせていただくことになりました。7年ぶりに八坂神社に奉納できる喜びを感じるとともに、また故郷で踊れたことにとても感動しました。子どもたちが少ないという課題もありますが、この伝統をこれからも守っていきたいです。



次郎獅子担当 大内 康雄 さん

初めて踊ったのは28年前になります。今回、ピンチヒッターのような感じで声がかかり、久しぶりの舞に緊張しましたが、この伝統を守っていくという責任感を持って踊ることができました。故郷のみんなのために、微力ながら貢献できたことを誇りに思います。機会をいただけるのであれば、長男にも獅子を継承したいです。



雌獅子担当 星 義和 さん

久しぶりの舞に体力的に大変な部分もありました。しかし、体が踊りを覚えており、これまで三匹獅子で過ごしてきた様々な時間を思い出しました。今回の奉納が、地域の復興に少しでも役立てたのであればとても嬉しいです。三匹獅子舞は地域の歴史とともにあります。今後も、みんなで力を合わせて大切に守っていきます。



笥（ささら）は、終始、獅子の先導を担う